



母
後
身
著

四十三
五九

服部文庫
117
59
9



天保十三年壬寅

三月 一矢部駿河守改易

四月 一乘馬 上覽

五月 一水野美濃守改易

一兩方武部 上覽

一役者海老丸改易

一笠間繁勲一件

117
59
9

一唐土移片駱嘉風流
一水尾公文三季三篇

十月
一江州駱嘉

九月
一仙毛公家一系

一琉球使浦原之家系

其家之法龍歌

天保十三年寅

三月廿一日

西九由為書后

筒井能伊守

在代 津津正七郎



其二也信所奉行勅命申云申年市中出教勸了所人
其方是也之立助令下之庚方之係米價引下之耐者
至米向之仲買并之米米口錢彼米向之移限即立
下之書之移之之法夜麻之流之云米米向之官如
也向之向之向之向之向之向之向之向之向之向之
豫阿之向之向之向之向之向之向之向之向之向之
抄紙下之庚方之向之向之向之向之向之向之向之向之

お初おのり正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
その事おのり正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
多き事おのり正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
由り正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
二つし正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
見し正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
負し正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
中し正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
事し正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事

減りおのり正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
下りおのり正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
事しおのり正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
事しおのり正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
山事しおのり正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
所事しおのり正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
押しおのり正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
始事しおのり正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
何事しおのり正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事
事しおのり正しく大斗しなり始末巨細しる事しる事

予之所書ありて 以て 悔い ちり 取 一 身 牙 痛 あり
海 之 中 知 ず 悔い ちり 取 一 身 牙 痛 あり
玉 にお 書 こと あり 悔い ちり 取 一 身 牙 痛 あり
取 一 身 牙 痛 あり 悔い ちり 取 一 身 牙 痛 あり
取 一 身 牙 痛 あり 悔い ちり 取 一 身 牙 痛 あり
取 一 身 牙 痛 あり 悔い ちり 取 一 身 牙 痛 あり
取 一 身 牙 痛 あり 悔い ちり 取 一 身 牙 痛 あり
取 一 身 牙 痛 あり 悔い ちり 取 一 身 牙 痛 あり
取 一 身 牙 痛 あり 悔い ちり 取 一 身 牙 痛 あり
取 一 身 牙 痛 あり 悔い ちり 取 一 身 牙 痛 あり

山 堂 人 厨 山 日 附 柳 尔 之 計 以 立 名

有 命 之 命
死 罪

有 命 之 命
中 止 取

揚 子 之 痛 死

日 以

仁 杖 可 不 書 矣

地 以 之 在 矣

相 仰 忠 心 事 物

高 木 可 不 書 矣

名 同 原 之 事



押込

名交り

後係り
山善治入印

年所、
少名、

中野、

中田、

中野、

佐久間、

加、

山後目附

石川、

森、

おつ
科
遠嶋

去、
也、
三、

三、

三、

三、

所、
仁、

揚、
仁、

仁、

三、

三、

三、

三、

江戸井

日

折寄の江戸井

〇 〇 〇 〇 〇 〇

日原川一多所

日原川 古くは

日原川

日原川 八所

日原川

日原川 古くは

日原川 古くは

日原川 古くは

日原川 古くは

日原川 古くは

日原川 古くは

日原川 古くは

日原川 古くは

日原川 古くは

日原川 古くは

日原川 古くは

日原川 古くは

日原川 古くは

日原川 古くは

日原川 古くは

日原川 古くは

江戸井 古くは

日

江戸井

江戸井

江戸井

江戸井

三也
鼓

押込

押込

根田傳次郎所

次助

原川佐助所

吉之傳

町方山田所

仙傳吉之傳

日原佐之助

永吉傳吉之傳

深川越中守所

古川源次郎

元重所

堀河所三目合元所

新入

儀之傳

元重仲實所

吉之傳

三科

五也

元重所

吉之傳

古傳所

吉之傳

津和所

七

神田所

吉之傳

安計所

吉之傳

町方所

吉之傳

古傳所
津和所
神田所
安計所
町方所
仙傳所
日原所
永吉所
深川所
古川所
元重所
堀河所
新入所
元重仲實所

三月廿三日

張のり子
朱教教
十月

先父張のり守を田にありて人并松平親名
より領に付付依し之を改易に 仰付上
長行領事不方日附申有申之次後也。中後町
寺山等ノ尉員附柳系之付領立合

天保十三年四月十六日

公方様御事馬并御領人此書

上後方也

公方様

如 七戸麻毛

家之保長御領御領
之為之御領御領

三

柄栗毛

三戸麻毛

麻毛

三戸麻毛

麻毛

三戸麻毛

水也越前守殿

十并方好殿

堀内守中殿

一 青
栗毛

七 女

一 朽栗毛

一 朽栗毛
考
河栗毛

一 考
栗毛

一 考
栗毛

七 六

朽栗毛

河栗毛

朽栗毛

考栗毛

考栗毛

一 栗毛

一 青

一 考
栗毛

一 考
栗毛
尾栗毛

七

七

一 青
栗毛

一 朽栗毛
栗毛

朽栗毛

考栗毛

考栗毛

考栗毛

考栗毛

考栗毛

一 朽葉毛

一 草

太

八

一 桑毛

一 麻毛

麻毛

一 草

野原桑毛

あま

教令式拾八人

東川の...

山切...

古田...

足也...

夏目...

... 御見

一 免首麻毛

一 草

一 中野田麻毛

...

松村桑毛

井出...

中野田...

接由書度
西國附也

國心為物
七坂第幾

本年四月日光山

御書讀之古事人ハ馬古力一振死ニ
御書納之百派中持用控之打立之辰之
打立之時之御書人ハお尋之
四月附之御書
古之御書之御書少尼之建之御書

名教路のり及素名屋江戸上卯也五素名
の素名に赴友時よのりし
君を世の斗かたしからあまはけ方につやあつても
まのあきしり方にいんたぬる地あるにらひんぬ
その名のぬぬより中しにらあふぬの振成
ふりしる鏡なるぬあ子のこの名教にへりてさる

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

宮六月廿二日

水野

水野備前守
代出丹宮

社又兵衛守石備前守ありしり身福屋園幡守歌
に仰付の依し其方了りてとて
作す

古々曉於古園之結心在中列所是く出目湖平歌
三五節お越す

水野
備前守歌
水野兵衛

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

其方儀陰居物也 作身以爲後御也
 御身之具不惟之速也 作身以爲後御也
 公儀不惟也 多者中身之相也 作身以爲後御也
 口外之具不惟之速也 作身以爲後御也
 重十倍也 作身以爲後御也
 石倍也 作身以爲後御也
 幅守也 作身以爲後御也
 古於傳之也 亦大月附也 作身以爲後御也
 所也 以鳥居甲也 亦大月附也 作身以爲後御也

流者方武術

上受之流也 亦大月附也

一 東平流 亦大月附也

打方刀

一 刀流 亦大月附也

忠也

打方刀

一 富永流 亦大月附也

打方刀

忠也

久保田新也

久保田新也

菅治方也

富永流也

富永流也

富永流也

富永流也

一 仁形流 仕合

打方刀

一 新当流 梳業

打方刀

一 心形流 仕合

打方刀

一 新当流 梳業

切方伊豆

林村方以高

少当流
打方刀

伊豆方高

小栗又

山月
打方刀

中川方高

本方高

西九郎

打方刀

三石方高

宝方高

本方高

西九郎

打方刀

本方高

恒高

田中

本方高

天野源

打方刀

本方高

坪内久

西九郎

打方刀

本方高

一刀柄片山流 小古刀

打古刀

一刀流 北谷

打古刀

弘流 北谷

打古刀

一刀流 北谷

打古刀

一刀流 北谷

打古刀

影流 北谷

打古刀

心瓶刀流 北谷

打古刀

浅山一傳流 北谷

田丸六之新

堀内小膳

古名保北之新

鈴木小市

新井小古市

津田平丸市

永井十之新

松田信之新

市島古之新

梅井新之新

水野古之新

山本古之新

古河古之新

上田古之新

新井古之新

折右刀

一 車耳新南流折右

折右刀

一 刀流 折右
忠也例

折右刀

一 新南流 折右

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

一 刀流 折右

折右刀

一 刀流 折右

折右刀

一 刀流 折右

折右刀

一 水刀 刀流 折右

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

折右刀

打右刀

一 天心流

天心流地しぬ
了業

打左刀

一 三和無敵流長流以合

打左刀

一 一刀流
思也品

打左刀

一 東門流極秘しぬ

打右刀強しぬ

人見ありしぬ

人見又七而

山ありしぬ
打右刀強しぬ

水野流

杉平九

池田新

杉木同流
打右刀強しぬ

嶋尾

嶋尾

打右刀

一 一刀流

打右刀

右平吉鏡流

打左刀

鎧術

五九

定田轉作

梶久五郎

新
戸田

大岡

素原

少
大

嶋崎

一 大鳴南流 多々之氣

打古刀

一 猛宝飛院流 多々之氣

打古刀

一 本流忍双流 七力

打古刀

一 大崎中流 多々之氣

山小住

吉原伊勢守

久保田新之丞

久保田潤吉

香沼大守

吉原新之丞

中島大守

坂本大守

古田人

山小住
國守

打古刀

一 本心流 多々之氣

打古刀

一 宝飛院流 多々之氣

打古刀

一 本流忍双流 多々之氣

打古刀

一 新當流 多々之氣

山小住

深谷新之丞

中島源吉

吉原伊勢守

大久保新之丞

鈴木新之丞

中條平助

本島大守

永井新之丞

打太刀

宝花流 〇〇〇

打太刀

宝花流 〇〇〇

打太刀

宝花流 〇〇〇

大内局

河井隆盛

阿部鉄成

市岡吉成

市岡吉成

大内局

横井親貞

水野甚四郎

忠内銀吉

本吉六郎

本吉六郎

本吉六郎

打太刀

宝花流 〇〇〇

打太刀

宝花流 〇〇〇

打太刀

宝花流 〇〇〇

打太刀

宝花流 〇〇〇

河井隆盛

阿部鉄成

市岡吉成

市岡吉成

横井親貞

水野甚四郎

忠内銀吉

本吉六郎

本吉六郎

本吉六郎

本吉六郎

本吉六郎

本吉六郎

本吉六郎

本吉六郎

打古刀

天淵流 打古刀

打古刀

宝珠流 打古刀

打古刀

柔術

北側流 打古刀

打古刀

富永流 打古刀

打古刀

北側流 打古刀

打古刀

北側流 打古刀

打古刀

起側流 打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

打古刀

一 神樹 新造流 勇之助

打古刀

一 乾信流 才助 徳助
格紋俵 兼山人掛

打古刀

一 乾信流 信掛 兼

打古刀

長刀

一 留多流 力多

打古刀

以上

備前國 備前守 備前守 備前守
備前國 備前守 備前守 備前守
備前國 備前守 備前守 備前守
備前國 備前守 備前守 備前守
備前國 備前守 備前守 備前守
備前國 備前守 備前守 備前守
備前國 備前守 備前守 備前守
備前國 備前守 備前守 備前守
備前國 備前守 備前守 備前守
備前國 備前守 備前守 備前守

水野甚高 備前守

水野甚高 備前守

中山市 備前守

中山市 備前守

中山市 備前守

中山市 備前守

中山市 備前守

中山市 備前守

中山市 備前守

中山市 備前守

中山市 備前守

水野甚高 備前守

水野甚高 備前守

六月朔頌 賜吹上園中冰因賦二絕

濱松閣老

瑤園拂曉啓嶒嶸頌 賜銀盤幾片冰滿坐清涼何
借扇流匙爽氣正稜

貯來六月玉壺冰白葛粟生寒欲凝 明主驅除人
間熱更令塵腑覺清澄

六月九日

此日
早色

右此日早色涼風頗快

十日

此日
早色

右此日早色涼風頗快

早色

早色

同日
早色

言しおとそくも能く通し不可言通し古所傳者
居宅長押造本等の中らに赤銅七字江陸
一打付庭向しに所懸名懸龍七字大石敷多
並又二回赤花内は不安像飾在敷向也重信
那物須添檀朱塗彫物也金五泥右三井一或
小算筒の赤銅七字金丸桐紋付の柄杓と洗物
殿一せお手ついで洗物おるの尺檜并頭古の箱
二本彫彩色の懸懸通し買五古瓶乃るの柄杓
る金砂子の並に粉細なるの懸懸年と菊柄五之
おぬ形に並にぬおる存所人へ貫符通し古櫃也

様と繩と平の座敷の内にお鏡の上上懸言用は不
くは下通るも又お人多く入るおる存草紙
貝字を流并洗る甲字の字は是を流何れも試用し
り多しおぬ殿一に懸言おる用は是先代へお傳へ七冊
那物にぬ付位へ付し言辭懸るも就おぬを
用みぬを垢ちりりもおぬ殿へおるも重なるも是又太
くぬちりりもおぬ殿へおるも重なるも是又太
拂へ懸るも重なるも信るの信去也十月留書素儉
弱し作書り身不ぬ信るも信梅阿へ居宅向也志
おぬ殿へおるも重なるも信るの信去也十月留書素儉

儲上之玉り珠出之不買其言其大七尺石燈
苑一石者清之成寺後月控之并帳其石亦如也
之取之言價亦古後日石名之使旁不局石踏
肯不并居宅石於石不其石上江戶十也四方追石存也

一保中三年

狂詩

治世吟

周公園吐哺

即今政道專寬仁番屋罷書日新二六汁切欺白髮
八文美酒鬱金香下刺橫街開新床三助地尻始錢湯小
倉野袴再顯世上回小袖空失光手馬借馬乍北動竹刀木刀
俄曳當今歲上覽大追物來年御成日光山強慾金貨

請此退困窮孝子賜賞還戲場洪移聖天町利下稀訟
御藏前南北奉行折骨捌東西隱密流汗旋世間一
統守聖趣仰見寬政享保年

壬寅雜詠十絕

無名氏

嚴重脚觸能行屆天保全如享保春請見町人風俗改
誰知手拭結頭巾其一 聖堂日講聽聞喧大學中庸
入德門別有所二 勸善事孝行張出自身其三
羽織木綿小倉袴窮二 武士甚流行比皆傳術俄師靴皮
柄大刀引地長其三 二百年來興行座春風吹替兩町
寒江都第一繁昌地唯有燒原淡雪殘其四 兩座引移

とあり

右院大僧正書中不承近日少下候に七日附
神尾山城書付日附

七日十日

奉合

水野備前守

代 水田三三

其三方保祖又美濃 誓居申不持て兼力あり
白附万子果、水馬原不奉し、玉正依し、前河津高
石上少将清入甲府勝手也 作付之

右院大僧正書中不承近日少下候に七日附

加州政務所

市屋多吉

日 後藤

長 佐々木

右之人

清定像不悖近年異國公文易し
不向至極身尚三月十八日如所重所極所

て 確

石田三三

之計曠日持久未見動靜故茲江蘇等處各
海濱均屬安寧此係商等唐山各船之際傳
聞所及即此具草
上 報

天保十二年丑十二月

丑五番船主 顧子英

全賊副 王秋清

丑六番船主 周蔭亭

全賊副 陳躍雲

偕樂園記

天有日月地有山川曲成萬物而不遺禽獸草木各保
其性命者以一陰一陽成其道一寒一暑得其宜也譬
弓馬焉弓有一張一弛而恆勁馬有一馳一息而恆健弓
無一弛則必撓馬無一息則必殪是自然之勢也夫人
者萬物之靈而其所以或為君子或為小人者何也在
其心存與不存焉耳語曰性相近也習相遠習於善
則為君子習於不善則為小人今以善者言之擴充
四端以修其德優游六藝以勤其業是其習則相遠者
也然其氣稟或不能齊是以屈伸緩急相待而全其性命

者與其萬物何以異哉故存心修德養其與萬物異者所以率其性而安形怡神養其與萬物同者所以保其命也二者皆中其節可謂善養故曰苟得其養無物不長苟失其養無物不消是亦自然之勢也然則人亦不可無弛息也固矣嗚呼孔子之與曾點孟軻之稱夏諺良有以也果由此道則其弛息而安形怡神將何時而可邪必其吟咏花晨飲宴月夕者學文之餘也放鷹田野驅獸山谷者講武之暇也余嘗就吾藩跋涉山川周視原野真城西有閑豁之地西望筑峯南臨仙湖凡城南之勝景皆集一瞬之間遠巒遙嶽尺寸千里攢翠疊白四瞻

如一而山以祭育動植水以馴擾飛潛詢可謂知仁一趣之樂郊也於是執梅樹數千條以表魁春之地又作二亭曰好文曰一遊非宮以供他日芬想之所蓋亦欲國中之人有優游存養焉國中之人苟體吾心夙夜匪懈既能修其德又能勤其業時有餘暇也乃親患相携乃朋友相伴逍遙于二亭之間或唱酬詩歌或弄撫管絃或展紙揮毫或坐石點茶或傾瓢樽於花前或投竹竿於湖上唯從其所適而弛張乃得其宜矣是余與衆同樂之意也因命之曰偕樂園

禁條

- 一 九遊園亭者不許先卯而入後亥而去
- 一 男女之別宜正不許雜沓以亂威儀
- 一 沈醉詭暴及俗樂亦宜禁
- 一 園中不許折梅枝採梅實
- 一 園中不許無病者乘轎
- 一 漁獵有禁不許踰制

右水府公偕樂園記及禁條得諸支封府中候藩杜遂良而騰士寅之冬日



戒大田秀實

久慈郡大田鄉有奇童稱長吉家極貧父耕母織僅免饑寒而長吉好讀書年甫十一善講誦經史今茲莫春余以放鷹投大田臨益習館一見異焉乃又召之於旅館特試以經史旁及翰墨余熟視其為人其好學出於天性勿論已其鳳目豐下貌溫而氣勁進退周旋爛雅可觀者其前程豈易測耶因命有司給以月俸使其得專力於文學且賜姓名曰大田秀實抑幼而聰慧者長

王家恨もこころに深く
挿し得ぬ心あり初指て
出未并の舟も古傳に
北國の御影を
座を代古不宿の
京都に
紅と中との江州に
代古不宿の
京都に
花も騒動政濱の
相おのる人
大坂法橋
口匠留河古の
怪しき時
何物流り
あり得や
大方一撥
河の由
琉球へ
道行
正の
言
馳と
傳
信
不
存
お
の
る
女
物
入
お
更
中
山

肥前佐賀侯 沼島 於川崎席札身一橋家と水合の

とあり

郎中士氣本豪雄
汝輩平生競盡忠
請見百年培養
力海東應知我家風

席上贈水府公 佐賀侯

回頭世上謾紛紛
嘗將毀譽附白雲
天下英雄統屈
拍平生知己獨逢君
林梢風斂鳥聲滑
檐角日暖梅氣
薰自戒宴安如鴉毒
從來治國要勞勤

奉和同前 藤田廂之助

不閑世上謾紛紛
英氣元凌邊海雲
幸有一樽修習

謾一作紛
紛一作紛
嘗一作謾
持一作以
暖一作暗
是
戒一作恐
要一作在

好不須反玷會群后西上逮藉此相贈梅里餘香
為孰薰休咎膳無方丈設俗客豈為雅賓勤

右佐賀侯詩或云水府公詩
未孰是其藤田某亦不知何人可託而正

弘道館梅樹詩

水府公

弘道館中千樹梅清香馥郁十分開好文豈謂無威
武雪裏占春天下魁

茅尔此湯德の國の外西てもふつとよ梅のむる乃

天保三之九月十日
能中多於公與州の何在れ去月廿七日
津園若齋
女子
と
少
男
月

天保三之九月十日
能中多於公與州の何在れ去月廿七日
津園若齋
女子
と
少
男
月

中成之其及及人其... 成之其及及人其...

九月十日

加友... 加友...

一 支掛

支掛

一 支掛

支掛

但陰府...

若色...

一 方小

一 方小

一 婦人...

一 婦人...

婦人...

一 九月... 九月...

世中... 世中...

一 及中... 及中...

一 及中... 及中...

一 及中... 及中...

一 及中... 及中...

一 及中... 及中...

一 及中... 及中...

一 及中... 及中...

一 及中... 及中...

一 及中... 及中...

一 及中... 及中...

世中...

只つかみの別荘まで 浦島王子

家をおく西浦のかこ牛山川といふ所に家守屋
ありかたん店かす只然といふをりりのおる
心からうおやう店うとまな人弘融僧徒の
あとおおんしるりといふ人まは拙かといふ
るりや不をあるいんもふいひあふあふ
けいふされなしたるあふなすあふをとい
よあおろえんつらあををゆりて止水の観
一あらのをほつらんかろりのかにあふ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the name '浦島王子' and other illegible characters.

か慶信と取りて形勢の違と相出と入れ
式人忠信のやうな海軍と
我も親利の海軍と
海軍と海軍と
政の仲敷と

西の海軍と
海軍と海軍と

海軍と海軍と
海軍と海軍と

海軍と海軍と
海軍と海軍と

海軍と海軍と
海軍と海軍と

海軍と海軍と
海軍と海軍と

海軍と海軍と
海軍と海軍と

海軍と海軍と

深き

深き... 深き... 深き...

し

し... 深き... 深き...

深き... 深き...

深き... 深き... 深き...

深き

深き... 深き... 深き...

深き

深き... 深き... 深き...

深き

深き... 深き... 深き...

深き

深き... 深き... 深き...

深き

深き... 深き... 深き...

深き

深き... 深き... 深き...

深き

深き... 深き... 深き...

ししにむなしくもなほいふことありては
あはれいふことありては
おとぼけをいふことありては
あはれいふことありては

あつしむことありては
あつしむことありては

いふことありては
いふことありては

いふことありては
いふことありては

いふことありては
いふことありては

いふことありては

いふことありては
いふことありては

いふことありては
いふことありては

いふことありては
いふことありては

いふことありては
いふことありては

いふことありては
いふことありては

いふことありては
いふことありては

秋の夜更

あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に

あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に

あつたあつた月夜に

あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に

あつたあつた月夜に

あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に

あつたあつた月夜に

あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に

あつたあつた月夜に

あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に

あつたあつた月夜に

あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に

あつたあつた月夜に

あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に
あつたあつた月夜に

あつたあつた月夜に

わろまのついでに...
 (faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

(faint text)

かゝるもの信じて居るは、
此の人の心の中に、
大抵の事柄は、
今も、

此一巻浦添孝之所詠也天保十四癸卯年
涼生其元高深秀筆早

薩陽樂水

